

8

関節痛・四肢痛

高村和幸

福岡市立こども病院・感染症センター 整形外科 部長

Point 1 四肢の疼痛を示すサインを見逃さず、臨床症状を把握できる。

Point 2 全身症状と局所所見との関連性を見逃さない。

Point 3 治療の必要がない状態と思いこみ、重大な疾患を見逃さない。

Point 4 確定診断を行うための種々の検査法を理解する。

はじめに

乳幼児期においては、患児が的確に四肢の疼痛を訴えることができない。そのため、現病歴は保護者から詳しく聞く必要がある。できるだけ正確に現在の症状を把握し、適切な検査を行い診断する必要がある。また、疾患によっては症状が急速に増悪することもあり、必ず経過を観察することが非常に重要になることもある。疼痛を訴えている部位だけでなく、近傍の四肢関節の状態、全身状態への注意も必要となる。

1. 診察法

新生児・乳児の場合、本人が疼痛の部位を教えてくれることはない。養育者からの問診と身体所見で疾患を予想して検査を行うことになる。

問診

まず問診を行う。いつから、どのような症状が起こってきたかを詳しく聞き、その後、その症状の経過やその他の随伴症状を聴取する。可能であれば複数の養育者から聴取するほうが望ましい。現病歴が非常に曖昧だったり、疾患と整合性が取れなかったりするような場合は、被虐待児症候群の可能性も視野に入れておかなければならない。疼痛がある場合、患児はその部位を動かそうとしないので、多くは手足を動かそうとしない、あるいはオムツを交換しようとしたら泣くというような症状を訴える。また、発熱の有無は重要な所見である。発熱がある場合、発熱した時期や経過を詳しく聴取する必要がある。骨形成不全症など易骨折性の疾患もあるので、家族歴の聴取も重要である。BCGの接種後に骨や関節の腫脹が起こる場合がきわめてまれにあり、BCGによって骨髄炎や関節炎を起こすことがある。BCG接種歴も聞いておく。

身体所見

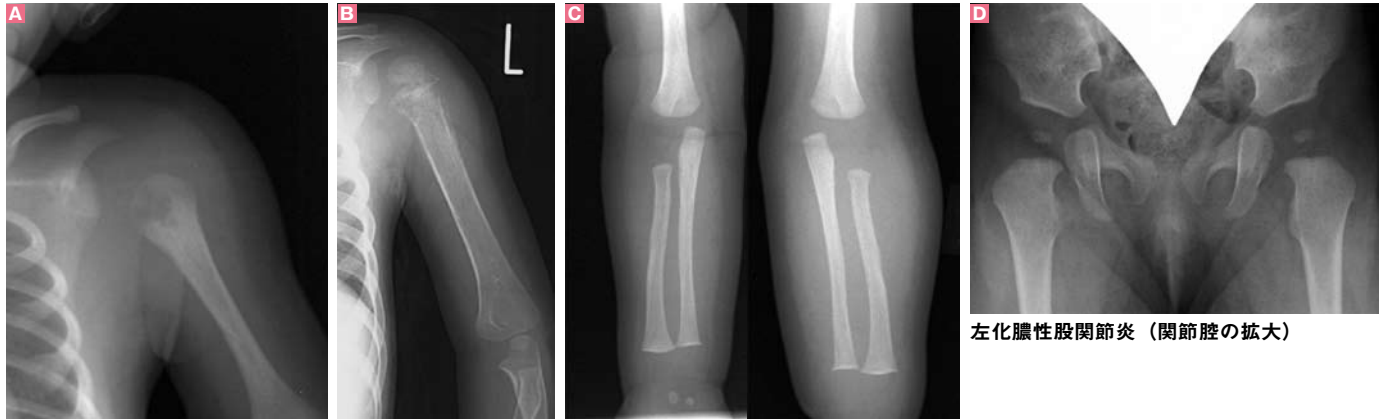
新生児・乳児の場合、まず全身をチェックする。四肢の変形があれば骨折が疑われるが、この時期の患児はあまり歩行

表1 関節痛・四肢痛を訴える患児の診察のポイント

問診	乳幼児では保護者から詳細に聴取する ○外傷であいまいな受傷機転や起りえない受傷機転はchild abuseを考える ○家族歴も重要（骨形成不全症など） ○受傷機転による肘内障や骨折の鑑別 外傷の場合は受傷で骨折の部位を推測する
視診	乳幼児は必ず全身をチェックする 古い打撲の跡や皮下血腫など他の部位の状態などを確認する
触診	所見のある場所を一番最後に行う

表2 関節痛・四肢痛を訴える場合の検査

血液検査	炎症反応、関節炎・骨髄炎・筋炎・蜂窩織炎などを疑った場合
単純X線検査	骨折・脱臼・関節炎・骨髄炎・骨腫瘍などを疑った場合
超音波検査	関節液の貯留、軟部腫瘍の確認
MRI検査	骨・軟部組織の詳細な変化が確認可能。ただし乳幼児では撮像時間が長い鎮静が必要
関節穿刺	関節炎の鑑別、関節液の性情、最近の有無



A 化膿性肩関節炎（骨融解）

B 神経芽細胞腫
（骨新生と骨融解）

C 橈骨骨髄炎（軟部組織の腫脹）

D 左化膿性股関節炎（関節腔の拡大）

図1 関節痛・四肢痛をきたす疾患の単純X線像

骨折、骨新生、骨融解像などの骨の所見、軟部組織の腫脹、関節腔の拡大をみる。

することもないため、なんらかの外力が働かないかぎり大きな骨折はありえない。転落や事故などのエピソードがある場合や易骨折性の疾患に罹患している場合以外は、養育者などから虐待をうけている可能性が強いので、頭部、胸部、四肢の単純X線検査で他の部位の骨折を調べなければならない。

発熱がある場合は、蜂窩織炎や骨髄炎、関節炎などの炎症性疾患を念頭に置く必要がある。炎症部位が多発する場合があるため、腫脹、熱感、発赤がある部位以外の触診を先に行い、最後に責任病巣と思われる部位を触診する。疼痛のある部位を最初に診察すると、疼痛のない他の部位を触診しても、罹患部かどうかを判断するのがきわめて困難になる。“**最も疑わしい責任病巣は最後に診察する**”（表1）。

検査（表2）

およその病巣を予測して単純X線写真を撮影する。小児の場合は成人と比べて軟骨成分が多く、正常の単純X線像が年

齢により異なり、またnomal variantも多く存在する^{1,2)}。患側のみではなく健側も、比較のために撮影し、正確な診断を行うべきである（図1）。発熱があれば血液検査、関節や軟部組織の腫脹があれば超音波検査を行う（図2）。また、骨腫瘍や慢性骨髄炎、短骨の病変ではCT検査が有効である（図3）。関節炎や骨髄炎、腫瘍などを疑った場合はMRI検査が非常に有効である。化膿性疾患では周囲組織の状態も把握できる（図4）。しかし、乳児期のMRI検査では安静が保てないため、睡眠剤で鎮静をかけなければならない。呼吸、循環を監視しながら施行する必要がある。四肢痛があると考えられるが責任病巣がはっきりしない場合は、シンチグラフィを考慮する。新生児や乳児の化膿性関節炎は、診断と治療の遅れが後に重篤な関節変形や成長障害に進行する原因となるので、緊急に検査を実施し、確定診断、治療へと導かなければならない。